

仏教絵本『とげぬき地蔵さま』にみる再話について (127)

〔個人研究〕

## 仏教絵本『とげぬき地蔵さま』にみる再話について

森 覚

## 1 はじめに

現代の日本で刊行される絵本には、特定地域の史蹟や寺社仏閣の由来、人物の業績、伝説や昔話、過去の風俗を物語化した「郷土絵本」というジャンルが存在する。この範疇に該当する作品は、物語の題材となる地方で暮らす人々を主な対象読者に想定しながら、郷土の歴史、文化、風土、習俗、産業等について伝える事を目的とし、なかには、区市町村の行政や図書館からの支援を受けて制作されている物もある。こうした絵本には、地方の歴史や文化を掘り起こす郷土研究や、読者が暮らす地域に根差したアイデンティティの形成を図るという地域学習的な性格が具わる。

本論文では、そうした種類のものから、特に仏教的要素が認められる『とげぬき地蔵さま』という絵本を取りあげる。これは、東京都豊島区巢鴨の曹洞宗寺院である萬頂山高岩寺に代々伝えられてきた延命地蔵菩薩の印象に関する伝承を題材とした作品である。「とげぬき地蔵」の通称で日本全国に知られる高岩寺は、江戸六地蔵尊の第四番である真言宗豊山派醫王山東光院眞性寺と共に、旧中山道筋の巢鴨地蔵通り商店街沿いに存在する仏教寺院である。<sup>1</sup> 毎月三回、四のつく日に開催される縁日を中心として、連日大勢の参拝客で賑わいを見せており、休日ともなれば、「洗い観音」と呼ばれる石仏の前には、長蛇の行列ができる程である。<sup>2</sup>

ところが、こうした地域の歴史と文化を次世代の子ども達へ伝える学びの一環として、高岩寺の伝承を題材にした絵本が制作されていた過去については、今日あまり知られていない。『とげぬき地蔵さま』は、出版当初に日本テレビの報道番組「ニュースプラス1」の「ニュースな街」で取りあげられ、その後、ラジオ等でも紹介されたが、一般の書店では販売されておらず、決

して全国的に知名度が高い絵本ではない。<sup>3</sup> しかしながら、この作品は、昨今各地で議論される地域の活性化という問題に対し、絵本が果たす社会的機能を明らかにする上で非常に参考となる。しかも特に注目すべきなのは、巣鴨周辺に住む子どもを持つ親たちが自主的に集まり、郷土研究を基盤とする手作りの地域学習活動と連動しながら制作されたという点である。

そこで本論文は、巣鴨地域に暮らす人々を主要な対象読者とした『とげぬき地蔵さま』という絵本が制作された事情について、郷土研究や地域学習という問題に絡めて見ていく事にする。

## 2 郷土研究と地域学習

明治時代にドイツから伝播したハイマート（Heimat）と重なる概念である郷土は、近代以降における文明化への反動から、在郷者の属性として認識される地域性に結合する共同体意識に支えられた概念である。また、出郷者の側に個別固有の記憶として認識される故郷という想念もこの言葉の意味に含まれる。<sup>4</sup> したがって郷土研究といえば、かつては、都市部に対抗する集団的同郷意識を形成するための試みであった。

その歴史は、日本政府の意向を反映した自治体史の編纂、あるいは、地方の名士等のアマチュア研究者による地誌や民俗、考古等の諸分野に及ぶ多様な取り組みとして、明治時代から始まる。大正時代になると、都市部への人口流出、国家間戦争による経済疲弊、世界恐慌等が原因となり、荒廃した地方市町村の自力更生を急務とする官製の地方改良運動が内務省を中心に推進され、これを後押しする官民一体の取り組みとして郷土研究が実施される。

明治・大正・昭和初期の郷土研究では、明治維新の先駆けとなった勤王家や、国家の発展へ寄与した郷土の偉人を検証し、英雄として神格化するべく、関連史跡及び文化財の保護整備が進められる。同時に、その成果は、文部省により学校教育の社会科へと組み込まれ、児童の皇民化政策を遂行する手段の一つともなる。これにより、諸個人の郷愛心は、皇国史観を基盤とする日本主義に連結され、日本人としての国民意識を強化する民族の神話を創出し、

中央政府の政策を円滑に進めるための正当性を提供するものとして利用される。<sup>5</sup>

ところが太平洋戦争の敗戦により、戦時中までのあり方は、大きな転換に迫られる。偏狭な郷愛主義を助長する中央集権的な郷土研究は、一転して批判にさらされ、それに代わり、フィールドワーク等の新しい手法を取り入れた反動的な郷土教育が提唱されるようになる。今日、日本の学校教育では、社会科や総合的な学習の時間において、郷土教育を実践している。1968年に改訂された小学校学習指導要領の中で正式名称化された地域学習は、郷土研究の蓄積を活かしつつ、生まれ育った環境を知り、その地域に立脚したものの見方、考え方ができる個人の養成を目指す教育的実践として位置づけられている。<sup>6</sup> 公的な教育現場での取り組みは、家庭教育の場にも広がりを見せ、更には、急速な都市化と国際化の中で埋もれていく地方性・地域性を見直しを追い風にしながら、「郷土絵本」も制作され始める。したがって、ある特定地域の歴史や文化を物語化し、伝承された民話を再話して伝える『とげぬき地蔵さま』のような絵本には、郷土研究や地域学習からの影響が多分に認められる。

### 3 作品の形態とあらすじ

『とげぬき地蔵さま』は、巣鴨親子読書会によって制作され、1993年に発行されている。全32ページからなり、サイズは、縦が25.5cm、横が18.8cmである。表紙部分の芯紙には、ざらついた手触りのシワ加工のされた黄金色の紙が張られ、見返し部分は、金箔と銀箔を蒔いた金銀砂子細工風の紙面になっている等、全体的に和風の趣が認められる。これらの装丁は、全て印刷所の助言によりデザインされたとの事である。<sup>7</sup> タイトルが記載される扉部分は、文字のみが記される前扉と、地蔵菩薩像へ両手を合わせる女性の後ろ姿が描かれる本扉の二つからなる。本文部分は、4ページから29ページまで続く全13見開きで展開し、30ページ目には、「あとがき」の文章があり、31ページ目には、奥付の記載がある。

あらすじを紹介すると、物語の舞台は、江戸時代で、高岩寺に伝来する延命地藏菩薩御影にまつわる話が綴られる。昔、今から三百年前の江戸は7代將軍家継の頃、千代田のお城から一里ばかり離れた小石川村にお美代という7歳の女の子がいた。お美代の父親は、田付又四郎という武士で、母親は信心深い人である。初雪が降った頃、お美代に弟が生まれる。又四郎は、後継ぎが出来たと喜び。お美代も姉になった嬉しさを感じる。年が明けて正徳三年の正月を迎えるが、母親は産後の肥立ちが悪く、寝付いたままである。又四郎とお美代は、方々の神社仏閣へ参拝するが、母親の病気は回復せず、医者にも匙を投げられる。弟は、元気に端午の初節句を迎えるが、一方の母親は手足が竹のように痩せ細る。母親は、夫に告白し、「私はもうあまり長くはないと思います。今まで黙っていましたが、私の生れた家にはたたりがあって女は二十五の歳までしか生きられないという言い伝えがあります。姉もまさしくそのとおりでした。私もあと半年で二十五になります。どうぞ子どもたちのことをくれぐれもよろしくお願いします」(p.10.)と言う。これを聞いた又四郎は、しばし言葉を発せられなかったが、泣き出すお美代の肩を抱き寄せ、妻の手を握りながら「こんな時こそ、そなたが日頃信心しているお地藏さまにおすがりしよう」(p.12.)と言う。

又四郎とお美代は、それから昼夜を問わず地藏菩薩に病氣平癒を祈願する。何日かたった後、看病に疲れた又四郎が転寝をしていると、夢の中に黒い衣に袈裟を掛け、錫杖を持った僧侶が現れる。僧侶は「これ、又四郎。そなたの熱心な気持ちは分かった。望みをかなえてやろう。よいか、わしの姿を一尺三分の印像に彫り、一万体の印影を隅田川に流すが良い」(p.15.)と語りかける。又四郎は言う。「そうしたら妻の病はさるのですね。しかし、私にはそのような技がありません」(p.15.)。それを聞いた僧侶は、「それではこれを進ぜよう」(p.15.)と言い残し姿を消す。又四郎は目を覚ますと、妻の枕元から夢で見た僧侶によく似た地藏菩薩の印像を見つけ、目を覚ましたお美代と共に、早速、作業を始める。二刻ほどで一万体の印影が完成すると、又四郎とお美代は、下男を一人共にして両国橋を目指し、「南無地藏願王尊、なむじぞうがんのうそん」(p.18.)と唱えて祈りながら、五月の夜空を映す

隅田川に一枚ずつ流し浮かべる。

小石川村に戻った頃には、夜も更け、又四郎とお美代は疲れて眠るが、翌朝早くに、母親の部屋からドンッという音がする。母親は、床から起き上がり、「いましがた、恐ろしい夢を見ました。痩せた目つきの鋭い男が私の上に飛び乗って首を絞めるのです。するとその時お坊様が現れて錫杖でその男をたたき、部屋から突き出しました。男は雨戸にドンッとぶつかって消えてしまったのです。そうしたらあんなに苦しかった胸の辺りが急に楽になりました」(pp.20-21.)と述べる。妻の言葉を受けて又四郎は、「まことか、そのお坊様はきっとお地蔵さまに違いない。ありがたいことだ。南無地蔵願王尊、なむじぞうがんのうそん」(p.21.)と感謝する。この日を境に母親の病はよくなっていき、再び寒さがくる頃には床を離れることができる。

ここから物語は、後半部へ入り、「とげぬき地蔵」という名称の由来をめぐる逸話に移行する。ある時、西順という僧侶が、田付家で起きた地蔵菩薩の霊験を聞きつけ、又四郎から御影を分けてもらう。この僧は、毛利家を訪れていた時、そこの女中が針を誤飲するという事故の現場に居合わせており、すぐさま、懷に持っていた御影を小さくたたんで水と共に飲ませたところ、程なく女中は、腹の中の物を吐き出す。それをよく見ると、中から針の刺さった御影が見つかり、この不思議さに人々は驚嘆する。こうしてお美代の家のお地蔵さまは病を治す「とげぬき地蔵」と呼ばれ、江戸の町でも評判になる。又四郎は、それから十年ほど経ったのち、この不思議な話を書き記し、印影と共に高岩寺に納めたという。

#### 4 豊島区の読書普及運動と巣鴨親子読書会

『とげぬき地蔵さま』では、制作団体として巣鴨親子読書会の名称が表示される。また、「あとがき」には、「絵は父親会員の前田岩夫さんです。表紙の文字は蔵元訓征先生にお願いしました」(p.30.)という一文がある。前田岩夫についての詳しい経歴は不明だが、巣鴨親子読書会に参加していた男性会員である事だけ判明している。

表紙と本扉のタイトル文字を書いた蔵元訓征は、雅号を長艸という、宮崎県都城市出身の書道家である。1964年に東京学芸大学を卒業し、毎日書道展会員、奎星会同人会員<sup>8</sup>を経て、現在は書道団体の醜美舎<sup>9</sup>を主催し、東海大学、東京学芸大学、都立大学で講師を務める。書だけでなく陶造形制作も行い、JR 大阪城公園駅改札口上部文字陶壁を手がけている。<sup>10</sup>

絵本を制作した巣鴨親子読書会は、東京都豊島区立巣鴨図書館の児童室をよく利用する母親たちが中心となり結成された、子ども達への読書普及を目的とするグループである。日本では、1960年代から親子読書と文庫活動が始められる。それは、日本各地へと普及し、1967年に発足した日本親子読書センター<sup>11</sup>と、1970年創立の親子読書地域文庫全国連絡会（親地連）<sup>12</sup>という二つの組織的全国運動へ発展する。

それと時を同じくして、豊島区では、1970年頃から池袋に在住する大松幾子ら主婦たちにより親子読書会の準備が始められる。このグループは、旧豊島図書館（現・豊島区役所分庁舎）、巣鴨図書館、千早図書館という区立図書館3館の児童室に勤務する藤沢愛子をはじめとした職員が働きかけにより結成され、団体の名称決定よりも活動が先行する形でスタートしている。豊島区親子読書会（現・池袋親子読書会）という正式名称がつけられるのは、1972年の事である。その後、同年に巣鴨親子読書会が結成され、千早親子読書会が1978年に立ち上がるものの、当初は、豊島区内の各区立図書館で独自に活動する形態がとられていた。それが、大松の呼びかけにより、連合組織化されるのは、豊島区親子読書連絡会が1979年に設立されてからである。その後も区立図書館の増設に伴い、新しい親子読者会が増加していく。<sup>13</sup>

このうち、『とげぬき地蔵さま』を制作した巣鴨親子読書会は、豊島区立巣鴨図書館で活動するグループである。絵本を発行した翌年の1994年には、巣鴨地域に住む20名ほどの親子が会員として在籍しており、毎月第4土曜日に巣鴨図書館で開催される例会を中心に活動している。例会は、「親子の会」と名づけられており、そこでは、低年齢の子どもに当番の母親がついて、本3冊の読み聞かせと工作を行い、年齢の高い子どもには、事前に読んでもらった本の内容についての話し合うといった事が行われる。また、会員の親

たちは、第二土曜日にも集まり、例会の準備と勉強会を重ねている。<sup>14</sup>

それに加えて、上部組織である豊島区親子読書連絡会では、毎月の会報発行と会報集の『あゆみ』を出版すると共に、毎年秋に講演会を開催し、会員たちに読書普及活動や児童書に対する知識が深められる手段や場を提供していた。講演会に招聘された講師には、児童文学者の大石真、児童文学作家の松谷みよ子、教育評論家の金沢嘉市、詩人の川崎洋、同じく詩人の谷川俊太郎、英米文学者の金関寿夫、名古屋外国語大学の学長を務めた国語学者の水谷修等がいる。この講演会は、1980年以降から豊島区立の図書館との共催となり、後に豊島区立中央図書館の単独主催という形に一本化していき、豊島区親子読書連絡会の名称は消えていくが、近年まで継続して開催された。<sup>15</sup>

## 5 絵本作りの経緯

『とげぬき地蔵さま』が制作された経緯については、豊島区の広報誌である『広報としま』No.913の巣鴨親子読書会をインタビューした「まちかど」というコーナーに詳細が記されている。これは、『とげぬき地蔵さま』の刊行を知らせる巣鴨親子読書会のインタビュー記事である。それによれば、今日、大勢の参拝者で賑わう高岩寺だが、「どのようにして「とげぬき地蔵」が生まれたかについては意外に知られていない。境内にある「洗い観音」をそれと勘違いしている人も多い<sup>16</sup>との事で、「地元巣鴨の「とげぬき地蔵」を広く知ってもらおうと巣鴨親子連絡会（代表 若山節子さん）の会員が手作り絵本「とげぬき地蔵さま」を制作した」という。<sup>17</sup> 祈願対象が地蔵から観音に変化した事は、風俗学者の圭室文雄も指摘している。本来の高岩寺は、本尊である釈迦牟尼如来を中心とした信仰形態にあったが、1844年の天保十五年頃からとげぬき地蔵の信仰が隆盛する。ところが、現在その信仰は、不調を感じる身体的箇所と同じ部分を洗う洗い観音に変化しており、近世から現代に至るまで、とげぬき地蔵の信仰は、いくつかの転換を経て変遷している。<sup>18</sup> 洗い観音については、現代の高岩寺境内を描いた『とげぬき地蔵さま』の表紙にも見えるが、この表現には、高岩寺の寺誌をふまえて、過去の



信仰が現代と異なる事を対比的に示す意図がうかがえる。

また、『広報としま』の記事には、「絵本は、文章、絵、レイアウトにいたるまで、同会の会員によるもの。高岩寺所蔵の文献等を調べ、それを子どもにわかりやすい文書にまとめ、ページの割り付けを考え、その文章にあう絵を描く。屏風風の美しい絵は父親会員の前田さんが描いたもの。去年の6月から制作を始め、約6ヶ月かかって発行にこぎつけた」<sup>19</sup>という制作の過程が記される。最後には、会からのコメントとして、「最初は会員だけに配るつもりでしたが、一生懸命作ったので、子どもから大人までみんなで読んでほしいと思います」<sup>20</sup>という一文があり、この作品が地域密着の絵本として発行された事をアピールする。

『とげぬき地蔵さま』については、豊島区親子読書連絡会が発行する会報の第154号と第156号にも関連記事が存在する。そこでは、制作の経緯を次のように記す。「「お地蔵さん」は、名前や縁日を知っていて多くの人々に親しまれていますが、そのいわれはあまり知られていないようです。一応、縁起など文章でちゃんと高岩寺の境内にも高札が立っていますし、印刷物などがあります。でもほとんど読まれていないんです。又、子どもには読めません。一番の目的は、せめて地元の子供達には、自分たちの町にある有名なお寺のいわれを知ってもらいたいと発行することにしたのです」<sup>21</sup>。

会報第156号には、「絵本『とげぬき地蔵さま』ができて早一ヶ月半で、既に第二版になりました」<sup>22</sup>とあり、初版が予想以上に売れた事が報告される。その理由として、マスコミ各社の取材をあげており、「最初に広報課の取材を受け、（この会報が出る頃には広報に載っている）その後、新聞各紙に紹介していただきました。さらにラジオでも取り上げられ、一瞬にして多くの方に本の存在を知っていただきました」<sup>23</sup>と記している。マスコミ取材の副産物も生じたようであり、「主人公の田付又四郎さんの子孫の一族の方と連絡がとれ、田付家の由来を知ることができました。又、高岩寺を下谷から今の所への移転に尽力した方のご子息から電話があり、あの地蔵通りは昔は淋しくて、商店街振興のため引っばってきたのだったそうです。下谷に住んでいるおばあちゃんからは「私が聞かされていたのは、和紙に地蔵の絵を書い



て、それを痛い所に貼るという話だ」と連絡を下さいました<sup>24</sup>という、作品を通じた様々な出会いについても述べられている。

この他に、『とげぬき地蔵さま』の頒布を告知するチラシでは、「巢鴨のとげぬき地蔵は江戸時代から病のとげを抜くと言っておまいりする人が絶えません。とげぬき地蔵はどんなふうにして生まれたのか、巢鴨に住むお母さんたちが絵本にしました」と説明している。これについては、作品のあとがき部分にも「私たちの町にしかないこのお話を広く知ってもらい、伝えていきたいとこの絵本を作りました」(p.30.)という記述があり、これらの記述から、高岩寺「とげぬき地蔵」の縁起を認知してもらう事がこの絵本の制作目的であると再度確認できる。

## 6 地域学習と自主出版物

さらに、『とげぬき地蔵さま』の制作には、上位組織である豊島区親子読書連絡会で取り組まれた地域学習や自主出版活動での経験も活かされている。豊島区親子読書会では、1975年から子どもと親によるお話しづくりを実施しており、子どもの絵画と造形指導者で、「絵本の会」を主宰する武藤順子に指導を仰ぎ、手作り絵本の自作に取り組んできた。この活動は、NHKの取材も受けており、完成した作品は、毎年秋に東京上野の東京都美術館において開催される美術展覧会「東京展」に出展されている。

その後、自作絵本を制作する取り組みは、本格的な自主出版物の発行へと展開していく。豊島親子読書会では、1979年に、豊島区の助成を受けて、最初の作品である版画紙芝居『すすきみみずく』（豊島区立中央図書館刊行）を発行する。この紙芝居の制作は、日頃、読書会で民話や昔話を聞いていた子ども会員から「池袋にむかしがなかったの？」という質問がなされた事を契機とし、親たちが「郷土豊島の伝説や昔話を子どもに語り伝え」<sup>25</sup>の必要性を感じた出来事から始められている。この際に、紙芝居が選ばれた理由については、実演する事で大勢に物語を伝えられ、幼児から小学校高学年まで、

異年齢の子どもたちが全員参加して制作できる媒体だったためである。

紙芝居制作にあたっては、豊島区の公刊図書である『豊島の民話』と『豊島風土記』に目を通し、その執筆者であり、区文化財調査委員を務めていた郷土研究家の伊藤英洪と後藤富郎から豊島区の民話と歴史を学んでいる。紙芝居の表現構造と制作方法の習得については、児童文学作家の横笛太郎から手ほどきを受けている。一方、版画の方は、長野県八千穂村の荒馬座八千穂民俗芸能センター所長を務めていた金沢佑光の指導により、1931年から全甲社を運営していた編集者の高橋五山が描く『〇□△ちゃん』等を参考にしながら、会員20名ほどで制作している。<sup>26</sup>

『すすきみみずく』は、巣鴨親子読書会でも見られた郷土の民話を会員全員で出版物にまとめるという創作スタイルの原点であるが、『とげぬき地蔵さま』の制作に大きな影響を与えるのは、1983年に発表された『豊島区郷土かるた』である。豊島区親子読書会の発足に関わり、豊島区親子読書連絡会の初代会長を務めた大松幾子は、親子読書会を「運動とか啓蒙より学習団体」<sup>27</sup>として捉えており、自身も豊島区の文化財に関係する仕事をしていたことから、郷土の昔を語り継ぐ重要性を事あるごとに認識していたという。そこで「古いものを残そうと思うなら、郷愁の対象でなく、これから生きていく人たちの息吹になるもの、わけても子どもたちのために」<sup>28</sup>という信念の下、紙芝居『すすきみみずく』と同じく、声に出す事で子どもたちに情報を伝え、身体感覚にうったえる媒体としてかるたを選び、46枚からなる『豊島区郷土かるた』の制作に乗り出す。

その準備段階では、俳人であり、宝生流の謡曲指導者であった郷土史家の後藤富郎を再び講師に招き、1982年に「豊島郷土はなし」学習会を開催している。現代と昔との結びつきを祖先から学び、現代に生かすという趣旨で開かれたこの学習会を通して、最初に団体として郷土かるた制作に向けて動き出したのが、1982年5月29日に、母子約35名で区内の名所旧跡をめぐり、かるたの文章を試作するべく句作を実施した巣鴨親子読書会である。<sup>29</sup>

学習会の修了後、実作に乗りだした段階では、『豊島区郷土かるた』の編集方針が次のように決められる。

- ①豊島区内を地域ごとに区分し親子読書会の各々の分担区域にする。
- ②必ず史跡を足で子どもといっしょに歩くこと。歩かなければ実感がない。  
実感なしで作句するのはよくない。史跡には、跡かたもなくなっている  
物や場所があるが、その跡地に立ってみることは肝心。
- ③現場で感じたことを直ぐにメモして、あとでよいから句や絵に表現して  
おくように。母親は一緒に歩きながら、子どものいった何気ない言葉を  
メモするように。母親自身も作句すること。
- ④句が出来たら、短冊に書いて、会ごとに集め、連絡会に持参すること。  
短冊に書くのは、編集作業を捗りやすくするため。<sup>30</sup>

『豊島区郷土かるた』の自主制作は、その経緯から見ても明らかなように、郷土研究と地域学習との連動によって進められたものである。しかもこの取り組みは、単発で終わることなく、1998年刊行の『豊島区郷土すごろく』や『豊島区郷土すごろくガイドとしま区いちにつきさんぽ』（2000年）といった、その後の作品にも活かされている。<sup>31</sup>

そうした展開の中、巣鴨親子読書会では、1989年に、『このゆびとまれ 巣鴨の子どものあそび今むかし親子で見えて聞いて歩いて調べた』を刊行する。ここでは、『豊島区郷土かるた』の札と共に「とげぬき地蔵（万頂山高岩寺）」の記事と、1982年11月から1983年3月にかけて制作されたペープサートと紙芝居の脚本である「紙芝居脚本とげぬき地蔵」を収録する。<sup>32</sup>『豊島区郷土かるた』が、巣鴨親子読書会の制作活動に与えた影響は極めて大きく、それから4年後の1993年に発行された絵本『とげぬき地蔵さま』の「あとがき」にも次のような一文が見られる。「「ゆめにみた とげぬき地蔵 よいおつけ」と豊島区郷土かるたにつくった時からおもしろい話だと思っていました。今でも御影と呼ぶお札を飲んで、悪いところが治ったという人がいるのも不思議だと思いました」（p.30.）。

また、『とげぬき地蔵さま』は、「高岩寺発行の『高岩寺誌』、豊島区発行の『豊島の民話』などを参考にしながら」（p.30.）制作されている。『高岩寺誌』は、高岩寺境内にある金属製の高て札に提示されている文章で、ここ

には、山号・寺号、開創年代、開山、開創地、当地移転という5項目とともに、「とげぬき地蔵尊御縁起」が記されている。一方、『豊島の民話』は、豊島図書館郷土シリーズ第2集として豊島区が1974年に発行した民話集である。これについては、豊島親子読書会が版画紙芝居『すすきみみずく』を制作した際に、同じく豊島区が刊行する『豊島風土記』と共に参考としており、巣鴨親子読書会もそれに倣ったものと考えられる。

## 7 おわりに

ここまで見てきたように、『とげぬき地蔵さま』は、郷土研究と地域学習との深い連動性が認められると共に、地域の活性化という問題にも関連するものである。そうした制作側の意図は、絵本の視覚表現へも確実に反映されている。たとえば、作中では、江戸時代に徳川家斉に献上された事で有名な巣鴨の菊や<sup>33</sup>、染井の桜といった、地域性を意識させる図像が描かれている。こうした部分は、地域に根差す共同体意識と連動した主体性の確立を読者に促す機能的効果を発揮する。そこで今後の課題としては、日本の生活文化に定着した仏教が、地域教育及び地域振興を目的とした絵本の材料としていかに利用されたのかを明らかにするべく、本論文ではあまり触れなかった絵本作品の表現を中心に考察していきたいと考えている。

(大正大学総合仏教研究所研究員)

本文注釈

- <sup>1</sup> 田中正明 「「一萬體印造地藏感應記」(現巢鴨地藏)について」(『仏教民俗研究 第5号』仏教民俗研究会 1980年) pp.42-43. 圭室文雄 「「延命地藏印行利益記」について」(『明治大学教養論集 第243号』明治大学1992年) pp.141-143. 圭室文雄 「日本における庶民信仰-とげぬき地藏信仰」(近藤正毅『明治大学公開講座Ⅷ 歴史のなかの庶民文化』明治大学人文科学研究所 風間書房 1998年) pp.13-14.
- <sup>2</sup> 圭室文雄 「「延命地藏印行利益記」について」 p.143.
- <sup>3</sup> 豊島区親子読書連絡会編『会報集その七 豊島区親子読書連絡会のあゆみ』豊島区立中央図書館 1995年 p.53.
- <sup>4</sup> 松本博明 「「郷土」とは何かー「故郷」と和解する場ー」(『國文學 解釈と教材の研究 7月号』学燈社 2008年) pp.26-33.
- <sup>5</sup> 依岡隆児 「日本の近代とハイマート(郷土/故郷)概念」(鈴木貞美 劉建輝編『東アジア近代における概念と知の再編成 国際研究集会35 2008』国際日本文化研究センター 2010年) pp.249-261.
- <sup>6</sup> 竹内裕一 「地域学習を軸とした社会科・地理教育カリキュラムの創造」(『千葉大学教育学部研究紀要 62』千葉大学教育学部 2014年) p.1.
- <sup>7</sup> 『会報集その七 豊島区親子読書連絡会のあゆみ』 p.54.
- <sup>8</sup> 「奎星会」<http://www.keisei-kai.com/> 2014年11月20日閲覧.
- <sup>9</sup> 「醜美舎」<http://www.shu-bi-sha.com/> 2014年11月20日閲覧.
- <sup>10</sup> 「醜美舎 蔵元訓征(くらもと ふみゆき、長艸)略歴」<http://www.shu-bi-sha.com/kuramoto/profile.htm> 2014年11月20日閲覧.
- <sup>11</sup> 「日本親子読書センター」<http://book.geocities.jp/oyakodokusho/> 2014年11月20日閲覧.
- <sup>12</sup> 「親子読書地域文庫全国連絡会」<http://oyatiren.net/> 2014年11月20日閲覧.
- <sup>13</sup> 『豊島区男女平等推進センター(エポック10)情報誌 えぼつく・めいか』No.32 豊島区 2007年10月 p.4. 池袋親子読書会編『みらいにむかってー池袋親子読書会二十周年記念誌』池袋親子読書会 1991年 pp.122-138.
- <sup>14</sup> 『えぼつく・めいか』No.32 p.4.
- <sup>15</sup> 大松幾子著 豊島区親子読書連絡会編『読書会は花あかり』かど創房 2006年 pp.92-111.
- <sup>16</sup> 『広報としま』No.913 平成6年2月15日 p.249.
- <sup>17</sup> 『広報としま』No.913 p.249.
- <sup>18</sup> 圭室文雄 「とげぬき地藏と治癒」(日本風俗史学会『暮らしの中の救い-祈りと信仰の風俗』つくばね舎 2000年3月30日) pp.72-73.
- <sup>19</sup> 『広報としま』No.913 p.249.
- <sup>20</sup> 『広報としま』No.913 p.249.
- <sup>21</sup> 『会報集その七 豊島区親子読書連絡会のあゆみ』 p.53.

- <sup>22</sup> 『会報集その七 豊島区親子読書連絡会のあゆみ』 pp.60-61.
- <sup>23</sup> 『会報集その七 豊島区親子読書連絡会のあゆみ』 p.61.
- <sup>24</sup> 『会報集その七 豊島区親子読書連絡会のあゆみ』 p.61.
- <sup>25</sup> 『読書会は花あかり』 かど創房 2006年 p.37.
- <sup>26</sup> 『読書会は花あかり』 pp.45-48.
- <sup>27</sup> 『読書会は花あかり』 p.124.
- <sup>28</sup> 『読書会は花あかり』 p.121.
- <sup>29</sup> 『読書会は花あかり』 pp.128-129.
- <sup>30</sup> 『読書会は花あかり』 p.131.
- <sup>31</sup> 「小林：豊島区郷土かるた」話し手：小林和子さん、柳川昌子さん、インタビュー：吉田いち子、撮影・編集：堂山真一 2012年1月28日アップロード <https://www.youtube.com/watch?v=ihOplcScn6U> 2014年11月20日閲覧. 豊島区郷土かるたの制作エピソードはNPO法人「としまの記憶」をつなぐ会（2012年設立）がYoutubeで公開する動画にまとめられている。
- <sup>32</sup> 巣鴨親子読書会編『このゆびとまれ』巣鴨親子読書会 1989年 pp.68-70.
- <sup>33</sup> 後藤富郎 沖田喜三郎 堀切康司 伊藤栄洪『豊島図書館郷土シリーズ第1集 豊島風土記』東京都豊島区 1971年 p.100.